

展示記録

企画展「東北大学とノーベル賞」

会期 平成26年7月30日(水)～8月31日(日)

会場 東北大学史料館2階 企画展示室

1. 企画の趣旨

本展示会は、ノーベル財団ノーベル博物館と東北大学が主催する展示会 Sketches of Science at Tohoku University の企画の一環として実施されたものである。Sketches of Science は、ノーベル博物館が世界各地を巡回して行っている展示会の一つで、50名を超えるノーベル賞受賞者が、大きな模造紙にメッセージや自身の研究内容をクレヨンで表現して紹介するパネル展である。日本国内では沖縄科学技術大学院大学 (OIST) と東北大学のみで開催である。

東北大学では、片平キャンパス内エクステンション教育研究棟1階においてノーベル博物館のパネルを中心とした展示会を開催すると共に、東北大学とノーベル賞の歴史的な関わりを市民に紹介するオリジナル展示として史料館を会場に「東北大学とノーベル賞」展を企画実施することとなり、史料館がこれを担当することとなった。



2. 展示の内容および展示会の状況

展示は、(1) 東北大学を訪れたノーベル賞受賞者、(2) ノーベル賞受賞者と噂された学者たち、という二つの展示コーナーを軸に構成し、当館所蔵資料を中心とした形で展示をおこなった。展示期間中はお盆期間を除いて土日会館を実施し、期間中の来館者は約800名にのぼった。

なお期間中のアンケートでは、下記のような意見・感想が寄せられた。

- ・ノーベル賞の有力候補者でありながら、戦争で受賞が不可能となった科学者がたくさんいたのですね。
- ・過去に本多光太郎先生初め多くのノーベル賞候補がいたことを知り、たいへん勇気づけられました。
- ・文系の自分にとっては難しかった。
- ・東北大学理解のための良い展示です。
- ・直筆のノートを拝見でき参考になりました。
- ・東北大とノーベル賞受賞者との関係がとてもわかりました。
- ・湯川博士等多くの先生方がいらっしやったことを改めて知ることができました。
- ・「Nozoe Autograph」や本多光太郎の実験ノートなど貴重な試料を見れたので、良かった。また、このような展示をぜひ行っていただきたい。

3. 展示資料目録・解説 -パンフレットより-



Sketches
of Science
at Tohoku University

東北大学と

ノーベル賞

-アーカイブズに見る受賞者たちとの交流-

2014.7.30~8.31

東北大学史料館 第1企画展示室



アルフレッド・ノーベルが遺した莫大な遺産をもとに、「人類のために最大の貢献をした人々」に対してノーベル賞の授与がはじまったのが1901年。東北大学はその6年後に産声を上げ、その後の日本の科学研究を担う若き科学者と学生たちが杜の都仙台に集うこととなりました。

両者が誕生した20世紀初頭は、科学研究の革命的な進展によって、人々の生活が地球規模で大きく変化を遂げていく、そのような時代の始まりでした。その中で、いわゆる「ノーベル賞」は、学術に携わる世界中の人々にとっての最高の栄誉とされ、引き継がれてきました。東北大学でも創立以来、多くの教授たちがこの栄誉を意識し、未知の世界へのチャレンジを続けてきましたし、またその中で、東北大学に集った学者や学生たちも、多くのノーベル賞学者と、国境や分野を超えた交流を重ねてきました。

ここでは、大学に遺された歴史的な記録＝アーカイブズから、1世紀近くにわたる東北大学とノーベル賞学者たちのかかわりを紹介します。

東北大学を訪れたノーベル賞受賞者たち

アインシュタインやニールス・ボーアをはじめ、東北大学にはこれまで数々のノーベル賞受賞者たちが足を運んで、教授や学生たちと交流を重ねてきました。それは、東北大学と世界の学術交流の歴史でもあります。

ここでは、史料館に残るアーカイブズの中から、かつての受賞者たちの東北大学訪問に関わる資料を紹介しています。



ヴェルナー・ハイゼンベルク
Werner Karl Heisenberg
1932年物理学賞 / 1967年来学
1901年生 - 1976年没

行列力学と不確定性原理によって量子力学の確立に大きく寄与した、ドイツ生まれの理論物理学者。1932年「量子力学の創始ならびにその応用、特に同素異形の水素の発見」により31歳の若さでノーベル物理学賞を受賞しました。コペンハーゲン大学理論物理学研究所留学中にニールス・ボーアに師事し、またライプチヒ大学在職中には留学中の朝永振一郎が師事しています。1929年に初来日。東北大学へは1967年来学して講演を行っています。



ハイゼンベルクの講演要旨 東北大学新聞434号



ハイゼンベルク講演会 (1967年) 川内記念講堂 (現秋ホール) にて



フリッツ・ハーバー
Fritz Haber

1918年化学賞 / 1924年来学
1868年生 - 1934年没

アンモニア合成法の開発研究で1918年に化学賞を受賞。1924年に製薬会社社長の招きで来日した際、東北帝大の眞島利行教授が仙台での講演を企画し、ハーバーと親交の深い理化学研究所・田丸節郎を介して講演が実現しました。講演は11月12日午後2時から工学部講堂でおこなわれ、多くの職員・学生が参加しました。

ハーバーの肖像画 1924年来学時に眞島教授に贈られたもの



東北大学を訪れた主なノーベル賞受賞者たち (1960代以前)

名前	出身地 生没年	受賞	受賞業績	東北大学訪問年
アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein)	ドイツ 1879~1955	物理学賞 (1921年)	光量子仮説に基づく光電効果の理論的解明	1922年
フリッツ・ハーバー (Fritz Haber)	ドイツ 1868~1934	化学賞 (1918年)	アンモニア合成法の開発	1924年
アーヴィング・ラングミュア (Irving Langmuir)	アメリカ 1881~1957	化学賞 (1932年)	界面化学の研究	1934年
ジョン・モット (John Hasngip Motit)	アメリカ 1895~1995	物理学賞 (1947年)	エディンバラ王立学会の議長として活躍	1935年
ニールス・ボーア (Niels Henrik David Bohr)	デンマーク 1879~1962	物理学賞 (1922年)	原子構造とその放射に関する研究	1937年
イシドール・ラーゼ (Isidor Isaac Rabi)	アメリカ 1898~1988	物理学賞 (1946年)	共鳴法による原子核の磁気モーメントの測定法の発見	1947年
セルマン・ワクスマン (Selman Abraham Waksman)	アメリカ 1896~1973	生理学・医学賞 (1952年)	ストレプトマイシンの発見	1952年
ルイ・ネール (Louis Eugène Félix Néel)	フランス 1904~2000	物理学賞 (1970年)	固体物理学における重要な応用をもたらした反強磁性およびフェリ磁性に関する基礎的研究および発見	1953年
フランシス・モット (Francis Motit)	イギリス 1895~1996	物理学賞 (1977年)	磁性体と無秩序系の電子構造の理論的研究	1953年
ジョン・バーディーン (John Spenser Bardeen)	アメリカ 1908~1991	物理学賞 (1956, 1972年)	半導体の研究およびトランジスタ効果の発見 超伝導についての理論 (BCS理論)	1953年
フリッツ・アンダーソン (Fritz Warren Anderson)	アメリカ 1923~	物理学賞 (1977年)	磁性体と無秩序系の電子構造の理論的研究	1953年
エルンスト・ルスカ (Ernst August Friedrich Ruska)	ドイツ 1906~1988	物理学賞 (1986年)	電子顕微鏡の基礎研究と開発	1956年
アオドール・リュネン (Aodour Felix Konrad Lymen)	ドイツ 1911~1979	生理学・医学賞 (1954年)	コレステロール、脂質の生合成機構と調節に関する研究	1957年
ヴェルナー・ハイゼンベルク (Werner Karl Heisenberg)	ドイツ 1901~1976	物理学賞 (1932年)	量子力学の創始ならびにオルト、パラ水素の発見	1967年
コラウト・ブロッホ (Konrad Emil Bloch)	ドイツ 1912~2000	医学・生理学賞 (1964年)	コレステロール、脂質の代謝と調節の機構に関する研究	1967年

※来学年の下線は、ノーベル賞受賞者として来学した例 ※1970年代以降も多くの受賞者が来学しているが省略した。

東北大学を訪れたノーベル賞受賞者たち



セルマン・ワクスマン
Selman Abraham Waksman
1952年生理学・医学賞受賞／1952年来学
1888年生－1973年没

米国出身の生化学者、微生物学者。ラトガース大学教授。20を超える抗生物質を発見し、「抗生物質」(antibiotics)という単語自体もワクスマンが考案したものです。結核治療に効果のある初の抗生物質であるストレプトマイシンの発見により、1952年にノーベル生理学・医学賞を受賞。1952年12月、ノーベル賞授賞式の帰途、故北里柴三郎生誕百年祭の招きに応じて来日し東北大学を訪問しました。



ルイ・ネール
Louis Eugène Félix Néel
1970年物理学賞／1953年来学
1904年生－2000年没

フランスの物理学者。1970年「固体物理学における重要な応用をもたらした反強磁性およびフェリ磁性に関する基礎的研究および諸発見」によって物理学賞を受賞しました。ストラスブル大学、グルノーブル大学の教授などを務めています。1953年に国際理論物理学会で訪日し、東北大学にも足を運んでいます。



アーヴィング・ラングミュア
Irving Langmuir
1932年化学賞／1934年来学
1881年生－1957年没

米国出身の化学者、物理学者。コロンビア大学卒業後、ドイツのゲッティンゲン大学で化学を学び、その後ゼネラル・エレクトリック社の研究所の研究員を長く務めました。タングステン・フィラメントが短時間で断線する原因究明に取り組み、不活性ガスの封入で電球寿命を延長することに成功。その他「界面化学」に関する豊富な業績でこの分野のパイオニアとして有名です。



ネヴィル・モット
Nevill Francis Mott
1977年物理学賞／1953年来学
1905年生－1996年没

イギリスの理論物理学者。1977年「磁性体と無秩序系の電子構造の理論的研究」でノーベル物理学賞を受賞しました。写真乳剤の感光過程の理論的解明(ガーネ・モット理論)、モット絶縁体などの研究が有名です。1953年には国際理論物理学会・京都の議長として来日し、東北大学へも足を運んでいます。



ジョン・モット
John Raleigh Mott
1946年平和賞／1935年来学
1865年生－1955年没

アメリカのニューヨーク州生まれ。大学卒業後、YMCAの活動を中心に、世界の学生キリスト教運動や世界教会運動の指導者として活躍しました。1946年にノーベル平和賞受賞。日本とも交流が深く計10回来日しており、1929年には勲一等瑞宝章を贈られています。1935年の9度目の来日の際に仙台を訪れ、東北大学での昼食会のあと、東北学院大学で一般講演をおこなっています。



国際理論物理学会と後のノーベル賞者4人の来学(1953年)

1953年9月、日本初の国際理論物理学会が東京と京都で開催されました。終了後、海外研究者は日本各地を視察することとなり、東北大学にはモット、ネール、バーディーン(1953年物理学賞)、アンダーソン(1977年物理学賞)らが訪問、東北大学の研究者と後のノーベル賞受賞者たちが交流しました。写真は金属材料研究所玄関での記念撮影。前列右から2人目がネール、3人目がモット、左端がバーディーン。

東北大学を訪れたノーベル賞受賞者たち



アルベルト・アインシュタイン

Albert Einstein

1921年物理学賞 / 1922年来学

1879年生 - 1955年没

20世紀最大の科学者

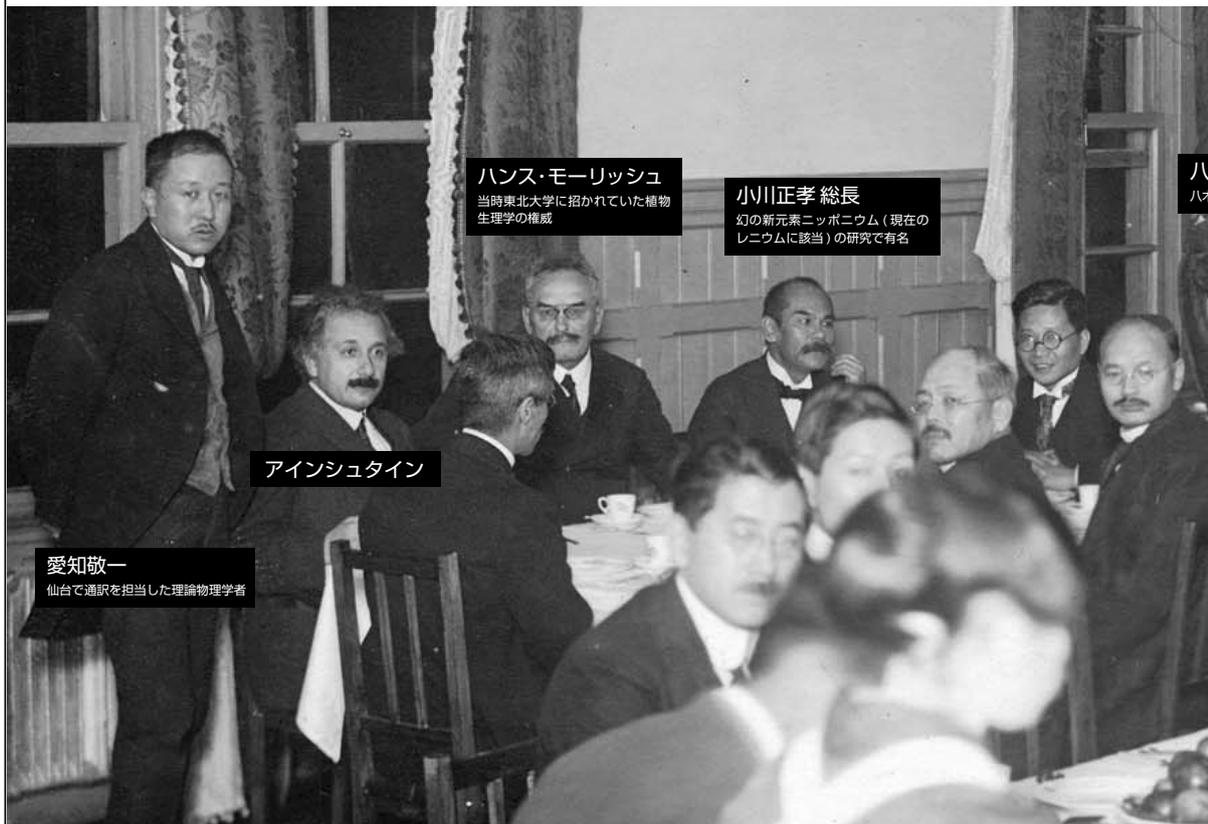
特殊相対性理論や一般相対性理論、光を粒子としてとらえる量子仮説など、現代物理学の扉を開く多くの業績によって20世紀最大の科学者と言われています。量子仮説に基づく光電効果の理論的解明により1921年のノーベル物理学賞を受賞しました。実際の受賞は1922年で、本人がこれを知ったのは日本へ向かう船の上でした。

アインシュタインと平和運動

アインシュタインは、科学者としての立場から国際関係や平和運動に多くの発言を遺しています。第二次大戦後は、国連総会に対し世界政府樹立の働きかけをおこない、死の直前には核兵器廃絶・戦争の根絶・科学技術の平和利用などを訴えるラッセル=アインシュタイン宣言に署名。この運動は「バグウォッシュ会議」の活動として現代に引き継がれています。

アインシュタインが東北

東北大学の創立間もない頃、アインシュタインがありました。1912年5月、総長(1881-1947)にあて、アインシュタインから送った手紙を送っています。石原は当時日本でもっとも深くアインシュタインについてと言われた物理学者で、翌年のもつて留学生生活を送っています。渉をおこなったのでしょうか。様々な面では、もし実現していたら、日米関係は変わっていたかもしれません。



ハンス・モーリッシュ

当時東北大学に招かれていた植物生理学の権威

小川正孝 総長

幻の新元素ニッポニウム(現在のレニウムに該当)の研究で有名

八木
八木

アインシュタイン

愛知敬一

仙台で通訳を担当した理論物理学者

アインシュタインと東北大学

大学の先生？

アインシュタインを外国人教師として招へいする計画が澤柳政太郎は、ドイツ留学中だった石原純助教授にアインシュタインの給料や契約年数など具体的な条件を指示

アインシュタインの理論を理解するには実際にアインシュタインにおそらくこの石原が実際の交際事情でこの話は実現しません日本の物理学の歴史もすこし変



石原純

アインシュタイン、東北大学を訪問！

1922年秋、アインシュタインは出版社の招きで日本を訪れました。東京での講演を終えて仙台に到着したのは12月2日。仙台駅は博士を一目見ようという人垣で埋め尽くされました。翌3日は、午前中に仙台市公会堂での講演をおこないその後松島を遊覧。再び仙台に戻り東北大学を表敬訪問しました。大学では、発足したばかりの金属材料研究所などを見学したあと大学の教職員・学生による歓迎セレモニーにのぞみ、その後の晩餐会で、夜遅くまで教授たちと懇談しました。



講演会のあと、松島瑞巖寺にて



木秀次

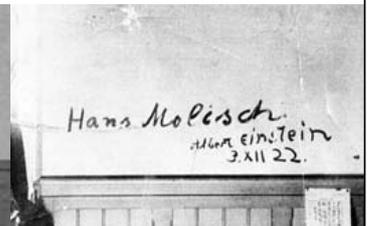
・宇多アンテナの研究で有名

本多光太郎

KS 磁石銅ほか、物質の磁性研究で世界的に知られる。金属材料研究所の初代所長

アインシュタインの壁書サイン

理学部生物学科の外国人教師ハンス・モーリッシュとともに、会場の壁に記したものといます。その後ガラス板でカバーされ保存されていましたが、2年後の火災で焼失し、いまは写真のみが残っています。



東北大学でのアインシュタイン歓迎会（1922年12月3日）

東北大学を訪れたノーベル賞受賞者たち



ニールス・ボーア
Niels Henrik David Bohr
1922年物理学賞 / 1937年来学
1885年生 - 1962没

量子論の育ての親

20世紀物理学の飛躍的發展をもたらした理論の一つ、「量子論」の育ての親。デンマーク生まれ。1913年、原子核と電子の関係を量子の考えを使い説明する「ボーアの原子模型」を発表し1922年にノーベル物理学賞を受賞。その後研究を進展させ「量子力学」を確立しました。

コペンハーゲン精神

科学者の国際交流を重視したボーアは、コペンハーゲン大学理論物理学研究所の所長として各国の研究者を迎え入れ、自由な議論による共同研究を積極的に進めました。その学風は、「コペンハーゲン精神」といわれ世界中の物理学者の憧れの的でした。

核開発競争の中で

ボーアの研究は、第二次大戦下において、原子爆弾開発にかかる重要な論拠とされました。その危険性に気づいたボーアは、核兵器開発をめぐる国際競争の激化に強い警鐘を鳴らし、原子力の国際管理協定の必要を訴え米英ソ連などの大国の間を奔走しました。



ボーアの講演風景 (1937年5月)

金属材料研究所にて
左から本多光太郎・ボーア・仁科芳雄

ボーアと東北大学

— 青山新一教授と1937年の来日 —

ボーアと青山新一

「コペンハーゲン精神」で知られるボーアの研究所には、日本人の学者たちも在籍し切磋琢磨していました。その一人が、東北大学の青山新一 (1882-1959) です。青山は化学者ですが、ボーアの研究所で仁科芳雄らの物理学者とともに、物理と化学の垣根を越えた共同研究をおこなっていました。日本人学者たちはボーア家にもたびたび招かれ、親しい付き合いをしたようです。青山は帰国後その経験を活かし、金属材料研究所の低温科学研究を主導しました。

ボーアの来日と東北大学訪問

1937年春、仁科や青山など研究所留学者の尽力で、ボーアは夫人と次男を伴い日本を訪問、東京・仙台・京都・大阪・福岡の各地で講演旅行をおこないました。仙台を訪れたのは5月3日。本多総長の案内で金属材料研究所と理学部を見学し、仙台市内での講演をおこない、市内見物のあと松島に宿泊しています。

下の写真は、昼食後に片平キャンパス内で撮影された記念写真です。中央の夫人を挟み左右にボーアと本多総長が座っています。ボーアの右側が青山、その右が仁科芳雄です。



ボーア夫妻を囲んで

東北大学を訪れたノーベル賞受賞者たち



湯川 秀樹
Yukawa Hideki
京都大学教授
1949年物理学賞
1907年生 - 1981年没

日本人初のノーベル賞

原子核内部で陽子と中性子とを結合させる「中間子」の存在を理論的に予測。1947年にその存在が実証され海外からも高い評価を獲得、1949年、日本人初のノーベル賞に輝きました。

兄も東北大の先生

学者一家に生まれ、長兄の芳樹（金属工学／九大・東大教授）は助教時代東北帝大に在職していました。次兄の貝塚茂樹は中国古代史研究の泰斗として知られます。弟の環樹も著名な中国文学者で、長兄同様東北帝国大学に在職しました。

平和運動

1955年、核兵器廃絶と科学技術の平和利用を訴えたラッセル＝アインシュタイン宣言に共同宣言者として名を連ね、1962年には核兵器と戦争の廃絶を訴える科学者京都会議を呼びかけ実施するなど、戦後の反核運動に科学者の立場から積極的にかかわったことも知られています。



湯川博士受賞時の新聞記事(夕刊とうほく、昭和24年11月5日)

湯川秀樹と東北大学

— 昭和8年数学物理学会と八木秀次 —

東北大学での運動場で

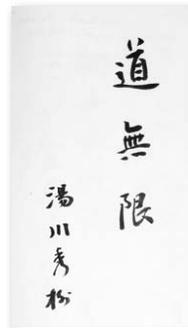
1933年4月、当時京都帝大の講師だった湯川は、東北帝大でおこなわれた数学物理学会で、生まれて初めての学会発表をおこないました。当時の湯川は、中間子論へと結実する研究の、産みの苦しみの真っ最中でした。この時の報告は論文とはなりませんでしたが、学会の空き時間、東北帝大の運動場の一角で、湯川は盟友の朝永振一郎（1965年ノーベル物理学賞）に、地面に木切れで式を書きながら、のちの中間子論のアイデアを語ったといわれています。

八木秀次との出会い

湯川はこの学会の時、兄芳樹の紹介で東北帝大工学部の八木秀次教授を訪ね面会しました。八木は新設の大阪帝大物理学科に主任教授として赴任することが決まっており、事実上湯川の面接試験でした。阪大移籍後八木は、筆の遅い湯川に対し、得意の毒舌を交えつつ、論文を書くよう厳しく叱咤しました。もちろん湯川の研究を高く評価していたからです。この中から生まれたのが、ノーベル賞受賞対象となった、中間子論の論文でした。



八木秀次



1952年、東北大学訪問時のサイン

「ノーベル賞候補」と噂された学者たち

2002年、東北大学卒業生の田中耕一さん(1959～)が「ソフトレーザーによる質量分析技術の開発」によってノーベル化学賞を受賞したことは、よくご存じのことと思います。

東北大学の教員や卒業生による受賞はまだこの一例だけですが、ノーベル賞発表の時期になると、毎年必ず何名かの東北大学関係者が「有力候補」としてささやかれ、大学でも受賞を想定した準備がおこなわれています。これは今に始まったことではなく、戦前の頃から繰り返されてきたことでした。

今年も何人かの候補者の名前がささやかれることと思いますが、それは今後の報道などで見ていただくとして、ここでは過去の歴史のなかから、ノーベル賞の有力候補とされたり、わずかの差で受賞を逃したなどと言われたりした例をいくつかとりあげてみます。



熊谷 岱蔵

Kumagai Taizo

1880年生-1962年没

医学部教授

抗酸菌病研究所所長

主な業績：インシュリンの発見及び結核の研究

第7代総長となった熊谷岱蔵には、生理学・医学賞を受賞するチャンスがあったと言われています。熊谷は1922年にインシュリン(insulin)の分離・抽出に成功しました。ところが、わずかな差でトロント大学医学部がより早く抽出に成功したため、インシュリンの発見者はカナダの整形外科医フレデリック・バンティング(Frederick Banting)と医学生チャールズ・ベスト(Charles Best)とされ、この両名が1923年の生理学・医学賞の受賞者となりました。伝わるところでは「弟子たちの嘆きをよそに、熊谷博士はいささかの動揺も見せず、結核の研究の道を突き進んだ」といいます。



本多 光太郎

Honda Kotaro

1870生-1954没

理学部教授

金属材料研究所所長

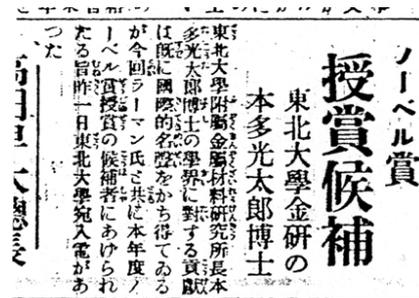
主な業績：鉄鋼・金属に関する材料物性学の確立

「鉄の神様」と呼ばれ1937年に第1回文化勲章を受章した物理学者・本多光太郎(第6代総長)のノーベル賞について、昭和3年(1928)11月2日の「河北新報」に、次のような記事が見えます。

ノーベル賞授賞候補 東北大学金研の本多光太郎博士

東北大学附属金属材料研究所長本多光太郎博士の学界に対する貢献は既に国際的名声を勝ち得てゐるが今回ラーマン氏と共に本年度ノーベル賞授賞の候補者にあげられたる旨昨日東北大学宛入電があつた

この年、実際に物理学賞を受賞したのはオーエン・リチャードソン(Owen Willans Richardson)で、記事に名が見えるチャンドラセカール・ラマン(Chandrasekhara Venkata Raman)は1930年に受賞しています。



本多がノーベル候補にあげられたとする新聞記事(河北新報昭和3年11月2日)

「ノーベル賞候補」と噂された学者たち



野副 鐵男
Nozoe Tetsuo
1902年生 - 1996年没
理学部教授

主な業績：ヒノキチオールの発見とトロポノイド化学の確立

理学部の卒業生で戦後理学部教授となった有機化学者・野副鐵男は、自然界には存在しないと言われていた、七角形の分子構造をもつ化合物「ヒノキチオール」の発見を出発点に、トロポノイド化学という新分野を切り拓き、1953年頃から毎年のように化学賞の候補と噂されました。戦中戦後の混乱の中でその業績が海外に知られることが遅れ、「欧州人だったらすでに受賞」とも言われていたようです。



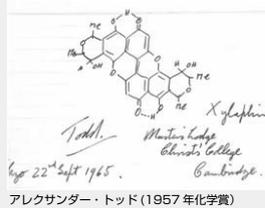
河北新報 昭和28年6月7日

野副鐵男の「化学者サイン帳」

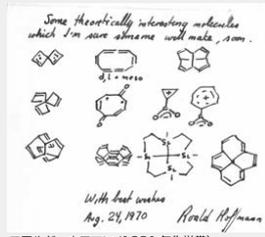
台北帝国大学の教授、後には東北大学理学部教授を務め、トロポノイド化学の発展に偉大な足跡を残した有機化学者・野副鐵男は、1953年の欧米旅行から約40年間にわたって、交流のあった世界各国の化学者に依頼し、数千にのぼるサインを集めました。

B5判全9冊・約1270頁にもなるサイン帳は、野副教授の幅広い交友関係を反映して、少なくとも32人のノーベル賞受賞者のサインを含む、3900名以上の署名等が記された貴重な歴史的資料となっています。通常のサインに加えて、野副教授へのメッセージや、書き手が興味を持っていたと思われる化合物の構造式なども書き込まれています。

サイン帳は現在、専門誌の企画でウェブ上でも公開されていますが、今回の展示では現物をご覧いただき、研究者の世界のつながりを感じていただければ幸いです。



アレクサンダー・トッド (1957年化学賞)



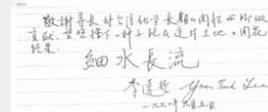
ロアルド・ホフマン (1981年化学賞)



福井謙一 (1981年化学賞)



コンラート・フロツボ (1964年医学生理学賞) と理学部化学科の教員 (1967年)



李遠哲 (1986年化学賞)



ハンス・フォン・オイラー＝ケルピン (1929年化学賞)

実物・複製品展示資料

ハイゼンベルク来仙記念書き

1967年(昭和42) / 理学研究科物理学専攻寄贈

ハイゼンベルク来学時に作成されたもので、本川弘一学長はじめ、山本義一理学部長等の名前がみとれます。寄せ書きにある仁科雄一郎助教授は、ボーアの元で学んだ仁科芳雄のご子息です。また笹川辰弥助教授は後に東北大学新聞に講演内容を寄稿しています。



ハーバー来学時の眞島教授の日記

1924年(大正13) / 『眞島利行日記』(個人寄贈)

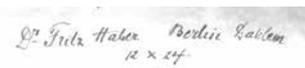
日記からは、ハーバーの招致の裏に眞島利行理学部教授の努力があったことがみとれます。眞島は連日総長・事務官と綿密な打ち合わせを行ったほか、11月3日には東京でのハーバー歓迎会に出席。12日の講演当日は病を押しながらハーバー一行を自ら出迎え大学を案内して回り、講演終了後、ハーバーが松島観光に行っている間も、ハーバー夫人を御霊屋・向山へと接待しました。ハーバーは仙台を発つにあたって、眞島のもてなしに感謝の意を述べています。



ハーバー来学時の直筆サイン

1919年(大正8)～1941年(昭和16) / 『芳名録』(総務部総務課移管/複製)

眞島利行の1924年11月12日の日記には、井上仁吉工学部教授の研究室でハーバーがサインを残したことが記録されています。芳名録のサインもこの来学の際のものです。



ネール、モット来学時の直筆サイン

1941年(昭和16)～1959年(昭和34) / 『芳名録』(総務部総務課移管)

1953年、ルイ・ネール、ネヴィル・モット等が東北大学を訪れた際に残したサイン。左上がネール、左下がモットのサイン。日付が10月1日とあるため、来学最終日に記載したものと思われる。



ネール、モットの来学スケジュール

1950(昭和25)～1954年(昭和29) / 『教授会議事録』(金属材料研究所移管)

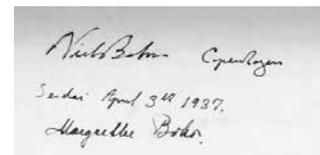
1953年9月の金研教授会ではネール、モット等の招への説明があり、所内挙げての行事であったことがうかがえます。増本量研究所長からは「遺憾のないよう充分注意して欲しい」と要望が出されています。

来客名	来客日	滞在場所	滞在期間
ルイ・ネール	9月1日	金属材料研究所	9月1日～9月3日
ネヴィル・モット	9月1日	金属材料研究所	9月1日～9月3日
...

ニールス・ボーア来学時の自筆サイン

1937年(昭和12)5月3日 / 『芳名録』(総務部総務課移管)

ニールス・ボーアおよびマルガレーテ夫人が東北大学訪問時に書き残したサインです。日付が April 3rd となっていますが、実際の日付は5月3日です。ボーアの東北大学訪問については、夫妻とともに来日した次男のハンス・ボーアが日記に記し、現在米国のニールス・ボーア・ライブラリー&アーカイブズ(NBL&A)に保存されています。

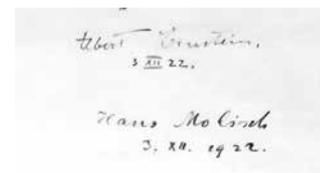


アインシュタイン来学時の自筆サイン

1922年(大正11)12月3日 / 『芳名録』(総務部総務課移管)

ページ中央上段に"Albert Einstein 3.XII.22"の小さなサインが見えます。下段は同時期にウィーン大学から外国人教師として東北大学に招かれていた植物生理学者ハンス・モーリッシュのサインです。

懇親会場の壁に書かれたサインが焼失したあと、学内にはアインシュタインのサインは残されていないと考えられていましたが、近年『東北大学百年史』編さんの過程でこのサインが再発見され、陽の目を見ることとなりました。



湯川夫妻来学時の自筆サイン

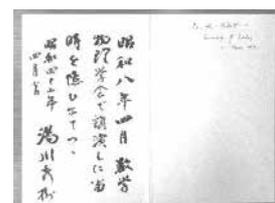
1952年（昭和27）8月16日／『光霽帖』（附属図書館移管）

ノーベル賞受賞の3年後、記念旅行のために来学した際に残したものです。前日に仙台市民会館で市民向けの講演を行った湯川は、この日東北大を訪れ物理学関係の教授や学生を対象に中間子論研究の現状について講演しました。図書館（現在の史料館）も訪問したようで、同行したスミ夫人はその後館内の一室で理学部の教授夫人たちと懇談したようです。

**湯川秀樹来学時の自筆サイン**

1967年（昭和42）4月7日／『芳名録』（総務部総務課移管）

「昭和8年数学物理学会」云々とあるのは、湯川にとって初めての学会講演であり、また八木秀次との出会いなど人生の転機となった、昭和8年に東北大学で開催された学会のことを指しています。

**もし東北大学関係者が受賞したらどう対応するかについてのマニュアル**

1991～2005年（平成3～17）／『ノーベル賞関係』（総務部広報課移管）

東北大学では1991年から、「ノーベル賞受賞候補者（本学関係者）」に係る対応マニュアルが作成されたことが確認できます。

候補者となった時点からの準備について、総長以下の人の動き、候補者の略歴の用意、受賞の場合の記者会見場の見取り図などが検討されている様子を読み取れます。今回は、2003年のマニュアルから、参考資料として付けられた、前年受賞した田中耕一氏に対する「総長談話」の箇所を展示します。

**本多光太郎のノート**

1916年（大正5）／本多光太郎文書 理学部物理学教室寄託

今回は、本多のノートのうち、「Magnetizing Note of Transformation」と題された3冊を展示します。当時本多は、世界最強の永久磁石（KS鋼）を作成するための実験の日々でした。素人から見ると単なる数字の羅列にしか見えませんが、そこに込められた気迫が、世界の金属材料研究をリードする東北大学の伝統を作り出したのかもかもしれません。

**野副鐵男のアズレン系化学物標本**

1950～1960年代／野副鐵男関係資料（鐵男鉄男先生追悼事業会寄贈）

有機化合物の中でも、芳香を持つ化合物（ベンゼンに代表される）の多くは、炭素が六角形の形に結合しています。野副教授はそれ以外の未知の物質を探求し、まずトロポノイド系（七角形の炭素結合）、その後アズレン系（青色の結晶に特徴）の物質を次々と合成しました。各地で講演するときなどは、色鮮やかな標本を見せて、化学の理解を深めるように工夫したそうです。その試料36点を展示します。

**野副鐵男のサイン帳**

1953～1994年（昭和28～平成6）

野副鐵男関係資料（野副鐵男先生追悼事業会寄贈）

このサイン帳は1999年10月に、野副鐵男先生追悼事業会から寄贈され、史料館で保管しています。野副教授が世界各地で、さまざまな研究者との交流のなかで集めたサイン帳から、アトランダムに数ヶ所を展示します。

